



中村俊定

中村俊定文庫
文庫 18
584



とくしつに月影をあるくは
御所の住御をすむるあり
はるるしにのりて休め
おるる御所をすむるあり
とくしつに月影をあるくは
御所の住御をすむるあり
はるるしにのりて休め
おるる御所をすむるあり
とくしつに月影をあるくは
御所の住御をすむるあり
はるるしにのりて休め
おるる御所をすむるあり

一斤の生姜あまのや致治
そとく切まね用ひくくの中
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくく

八十首の中書を我



一片の生姜まはりのや禮詣

あくくくくくくの新酒くくく

小坐敷と夜の明るまで月ありそ

よふかた風のとよく篠竹

笠お着し形てこころのと休くくの

くくくくくくくくくくくく

存義



淨阿

可因

李風

泰郷

亀岱

ちよろしと鼠のつづる棚の上
 水はを日陰ふちのり丸薬
 奈良舊まつ冬の柳のちりも
 志のい車先も追りせす
 物くみいちちとらりの女ふて
 すきふまれらる箸木ちりら
 ちんしと茶能煮あくる朝の月
 はろいありせて稲苅ふちく

和永
 常仙
 恭里
 古友
 如英
 連馬
 山花
 李院

犬ころの足ふまつりる稍はす
 割籠五川は覆ふちりら
 時分とそとの塔頭も花はうり
 窓へ糞へて往くくひす
 長閑よとくを隠居の點頭き
 竹輿ふりかく秩父街道
 青梅のさるちあらし生こも
 引もきくすふちくきん啼

蓼江
 秀義
 菊堂
 桃里
 猿飛
 北川
 西坡
 恭郷

離き住む親お客ともすや

李院

十とせさるる初の腹帯

恭里

祈つる神の本地おなま

桃里

海のかさよの明礪磯山

如英

秋風を旗さく物のひるま

浄阿

何とまらして菌煮うら

和水

衣うつ月の夜ころも身ハ裸

連馬

軒と都を流く深草

存義

以うえりた會符挟るる柳行李

李風

盛るまのきや膳を飯次

山花

すかしても懐お子の聞入ま

古友

虹吹けさすもふ暮のころ

菊堂

限る花咲はる多峰も雲

常仙

こころの色直寸松の枝

蓼江

存義重た病い治しつゝと馬嵐
智丈の文の端を聞つきを幾句
しつ賀しはうりす

あつ後よに風のきつゝのや田苅過玉馬
我師の師の存義も師とまぢあぬ
をこのふむつひぬるう初秋のころ
あついふちぢあぬさうさもさう
老ぬる人と朝れ夕れさ心くさ

きふ脳そぬるころれまを彼弟子
の誰渠も心ぢあぬさうさもさう
あつしつちぢあぬさうさもさう
しつし師の歡ひぢ見るさうさも
しつ此道もまあさ棄らさうさも
ちとわもふともの狂りぢさう
ふぢんよらさう川のあさぢ
ぢたららぬ

秋風と天をちりすもや夏きく人の臍會

治しかつた有無菴の快氣を賀

しる

七咲は法由もくしるを菊の花傘露

賀

はくうりく野分は跡の草の花菊芳

有無庵の快氣を賀してはくうりす

橙は生きかワリく千この秋吐雲

有無庵老人秋のちりめよのしそ

ついでに臥し浅茅の露をとん

と危かからし今神薬の力を

あつあつふ古松の霜を積

まんじふ賀し侍まぬ

爲樂庵

鈎合のよれへ倒きぬかすしうれ雪川

有無菴老翁は快氣を喜ばる

ワキを祝ふことくの菊の節句哉村鳥

師の病い重かりしまゝ世人と
たうやく過ありしと申す
ふりきよ平愈ありしまゝ歡

ひのあまの祝

好古菴

も後れと誰あやまのそ翁艸存雅

賀

やまのふも勝り堪えおきれ草李井

其引

一列の安堵を賀

頼もやちぬあるまゝの松の秋 桂阿

手入より百いさうと生り瓢 未白

菊の香やむうちかろの老う門 雨秀

存義翁の快復を賀

舌うちもあつらよまの菊の酒 鶴齋

右无菴主快氣の賀

やゝ寒より力つまゝの角力取 柳後

かきしと氣も若やくや菊の酒 兎玉
春かろの手入見くさるきくみ秋 野蘭
此翁の猶恙ちのんくみ祈る

長月や君のよもみぬ升の市 沾我

賀

雨ふあふつ尚色もゆるもち哉 可榮
霧ちるきくはく青峰の松 季流
かろ又みく千代ぬ菊の酒 吳中

降とみふきつといもち雨後の月 寛我

賀

雨霽つ起あつらる芙蓉くれ 金馬
本復ぬ賀る

中しふ根つよく見へ流竹の春 萬花
賀

やちのいのか減や菊さつらる柴 月成
みちく又屠蕪の後ねるきく酒 菊武

煎藥とよく休むとも菊の信也一馬
有無菴の病も平愈あるは賀す

霽晴とちうぬ山行秋の不盡 九臯

八十のころ重た煩ひもやまぬ

とまふ百とせぬとめをたき

ちう居すまいちうの心法も折目

高彩るよのつひ若老人ふあはす

まんと張勢臂ふかきもの菜萁袋 亀文

賀

さつちのりと日次ちかまぬ九月盡 秀虎

實の入るちう後やすはる豆名月 寒川

地ふあふる尚色うく祿松秋 連城

老師の全快を祝して

あつちよくおちく秋也祿き月 如髪

吹晴るりつふとちう月も照 市隠

裁うくそ千もふ咲也菊の花 理同

まのあゝりの 矜い延ゝる菊の露
色うくぬ松と又來るちとせうれ
都秀

名月七闕る間と寐ておんんと宣い
るるちとせうれ

雲晴てぬきうい月のちのあかれ
萬都

有元菴老人が二月の初めの病が松
林に臥あふち此秋とち不快氣
あふと誠る老木の榮へ久かんと

祝ひ侍り

色うくぬととら松がちと哉
桃牛

角カまてととら老の機嫌れ
登舟

秋來ても蕪鉄平釘が葉色かれ
文魚

月の蝕む頃わいと有元菴が主人
例ちと枕おむののの菊の雫
の養いぬ得て心後しと今
よの千代のちとちととと

わらわ侍る

あつらよやりもつとくし姑後の月 雞口

危をいつつきの本復を壽たて

身の秋ふ妙を得らまう翁れ 秀國

此老翁の重た病ふも日松經元

の人ふかつまうとわらわちふ歡い

まひせ

雨風を志のたしそりち哉 笑天

賀

雨少りかこまる土也菊ちけ 恭郷

あつらかゝ蘓生也阿きのうを 如英

本復の足ちう詠よ生姜市 和水

草の戸もいちふ也菊の花の秋 李院

養ひ手手際見せら菊の寸 西坡

百とせはきうかちぬ松の色 嵐十

野分ふも踏こくうの角丸州 馬山

夜寒ふもつこまぬくもて天の雁 馬嵐
露霜ふむくはらのの家居哉 蟹丈
やいふて盛見せらたきれ草 猿飛
北風とふぢとかいし松の色 桃里
く後しと暴風の跡の柳うれ 北川
師翁のたもに病いのきつるふ
ちのあひくは歡ひて

秋きぬ宿をたのしむるひも 古友

賀

初立の新蕎麥うちを饗さん 波文
百の餘とさうくちのるの園の菊 吳山
まめ鳥の名も折かすの祝ひうれ 李風
あろあくひんしちもい鱸うれ 蘭秀
露霜ははりのとくむ免賽 塞馬
かろく快氣の杖を曳きまを
こまのあひる

初々ちの茵山ち菊見ぬ
秩田能又そののちる勢い哉
秀民

賀

はも霜小凋むひるち園の菊
撫て見よ髯と比ぬる粟の球
泉之
輕羅

賀

八十ぬらつき立や千代の秋
菊も今人の手かぬきあひれ
桃賀
蓼江

老師の病ひ爽たぬ賀奉る

あふたの種る菊能籬うれ
神鹿

有元菴師叟の快復の壽を申さんと

可因のうらぬ始ち同門の誰渠來ま

せる其筵の末小連を待りま

うち寄る新酒酌ちやも後祝ひ
恭里

師父の病ひわらぬのちを

夜ぬやもく我も以祢る秋の雨
可因

師翁老後のみづつた八眉の思ひを
あせりのかろくして快復あゝ南山
の壽小並ひ松樹千歳不朽のよゝ
この松諷ふ

松山也音のこよそ小風は秋
常仙
初秋の風くちよの老師の
あつてくつていせも誠を人
肌骨を破すとや隨身のたのこ

病ふのちもわろく菊のさく頃ハ
まろくこと本小復しあひくるを歡
ひ侍りま

枝葉まろ活うつらりの菊は水
淨阿
夫子の病痊可せし賀し
はくうやく二夜は月のあるくれ
菊堂

老師秋の初ちよの残る暑は脳
て床を臥しあひぬ世人さ(月花)愛

あかぬまをて我し此道の父も
母も頼る傳たぬまを日夜心を碎た
あえつもの祈り薬餌の験たえふ
日を経る安全との素よの堅固の性
質あること壯年の者も及ぶ所あり
一時の風雲散りて跡たえり如く歡喜
し一章た呈す

さのもちたあ〜〜た迹やつら儀 連馬

我師有無庵文月の頃よの病た
抱る老病人を驚くす然せしを
醫師の妙手た得てまのあゝの歡喜
の眉た開くことを得るの崑崙
の竹と一度凋んと〜〜二葉を
ちす恒とす其壽千歳を限るを
〜〜す雖も黃帝この竹をりつ
始る律を作る我師の業風非違壽

も千さひしと諷ひ侍るま

切紙千代紙粉ひかき祢ん竹の春 山花

重陽

病中の吟

あうつき紙護符も

今朝やまきく紙酒 存義

天明二年壬寅秋九月

